員工重大事件之救助感謝信

尊敬する董事長殿

わたしは袁英と申します。合璧という大家族の一員です。かつては毎日ほかの同僚とともに頑張っていました。しかし、ある日突然、わたしの体が異常を発しました。病院へ行って検査すると、風湿性心臓病と判断されました。どうしたらよいかわからず、ただ呆然とするばかりでした。この状況を知った楊経理と林経理はお見舞いに来たあと、このことを董事長に伝えてくれました。董事長はすぐに電話でわたしを慰め、励ましてくれました。できることは何でも全力でやるからといって、わたしを安心させてくれました。すると、わたしの中で病魔に負けてはいけないという強い気持ちが燃え上がってきたのです。

こうした会社の支えのもとで、わたしは無事手術に成功し、いまは退院して会社で静養しています。わたしが入院している間も会社で静養している間も、董事長は毎日電話をくれました。そして董事長の息子さんの奥さん、王さんは何度もお見舞いに来てくれました。このとき彼女は見舞金として現金2万元のほか、熱々の魚や豚レバー入りスープを持ってきてくれました。また、同僚たちは進んで募金をし、わたしを援助してくれました。これらに対して、わたしと家族は本当に感激しました。そして合璧という大家族の中の深い絆を感じました。

今回の感動はわたしの目から流れ出し、細胞のひとつひとつにまで行き渡りました。この気持ちはうまくいえませんが、とにかく助けてくれた人のひとりひとりにお礼をいいたいです。みなさんを愛しています。この家を愛しています。そしてわたしはいつでもずっと合璧人です。合璧の精神で輝き続けます。みなさんの援助を、わたしは一生忘れません。わたしは合璧という大家族の中にいます。それは両親に抱かれながら温かい日差しを浴びているようです。

「わたしは合璧を愛しています。合璧もわたしを愛してくれます」、「わたしは董事長を愛しています」。この言葉はいつもわたしの心の中にあります。董事長にいいたいです。合璧という大家族はみんな董事長を愛しています。董事長といっしょにいたいと思っています。なぜなら、董事長はわたしたち心の中の偉大な人物ですから。わたしはこのような心と縁を大切にしたいと思います。そして、董事長や同僚たちのくれた、わたしへの愛に応えるために、一日も早く元気になって皆さんのもとに戻りたいです。最後に心から董事長の健康をお祈りします。そして同僚のみんなにも幸せが訪れることを祈っています。

上海合璧製造課同仁　袁　英

「袁英さん援助大作戦」で感じたこと

入社間もない頃、わたしは「感謝報恩、回饋社会（感謝に報いて恩返す、社会に還元する）」とはどういうことか、どうすればそれができるのか、ずっとその答えを探していました。そして「感謝報恩、回饋社会の実例」という分厚い資料を見たとき、その答えがわかりました。わたしたちの会社は慈善事業団体ではありませんが、とても多くの慈善活動を行っています。これこそ「感謝報恩、回饋社会」だと思いました。董事長が2010年の行動方針で「関心、関懐、関照（気配りと思いやりをもって接する）」を挙げたとき、わたしはどうやってそれを定着させるのだろうと思いました。しかしそのあと、董事長の日頃の従業員に対する言葉や態度こそ、この方針そのものではないかと気付いたのです。そして袁英さんを助けた今回のケースもまさにそれに当てはまるものだと思いました。

わたしたちの会社には袁英さんという現場作業員がいます。彼女は風湿性心臓病を患い緊急に手術を迫られました。董事長がこのことを知ったとき、医療費と手術費あわせた5万元は彼女の手元にありませんでした。董事長はひとこと「全力で彼女を助けよう」といいました。「全力」。特にこの二文字を強調しました。さて、ここでそのときの様子をご紹介したいと思います。

2010年4月14日。これが手術の日です。会社は手術費の2万元を用意していましたが、仕事が忙しかったため、前日13日の正午になってもお金はまだ病院に支払われていませんでした。これを知った董事長は幹部たちをひどく怒りました。そして午後3時半までに必ず支払うよう厳命しました。このあとも董事長はお金がちゃんと支払われたか、袁英さんの口からはっきり聞くまで確認を続けました。そのときの董事長は真剣な態度でした。いつも董事長が口にする「何事も最後まで確認すること」という言葉を自ら実践しているようでした。そして、今回、そんな董事長を見て、わたしたちはどうやって確認するのかを学んだような気がします。

4月14日手術当日、董事長はわたしたちに早めに病院へ行くよう指示しました。6時に出発。7時に病院到着。8時に袁英さんが手術室へ。そのあと午後3時半になってやっと彼女と話をすることができました。それまでわたしたちはずっと手術室の外で見守っていました。董事長も台湾から30分毎に状況確認の電話をかけてきました。心臓病の手術ですから、やはり多かれ少なかれ命の危険があります。董事長は電話で心配そうに「順調に進んでるか」と聞きました。そこには一従業員に対する思いやりの心があふれていました。こうした董事長の態度には手術室の外にいた看護人やほかの入院患者の家族も驚いていました。董事長が安堵の笑顔を見せたのは手術が無事終わったという報告を聞いたときでした。

手術当日の朝は会社の朝礼で従業員いっしょに手術の成功を祈りました。そして、それぞれ自分の生活費の中から募金しました。このときの袁英さんの無事を祈るみんなの気持ちからは合璧精神の一端が垣間見られたような気がしました。こうして集まった大きな力がやがて大きな希望へと変わっていったのです。

袁英さんは退院後、会社の手配した車でご主人とともに会社にやって来ました。そしてきれいに整理された1階の幹部室で静養することになりました。その後も董事長は毎日状況確認の電話を入れ、董事長の息子さんの奥さんの王さんは熱々の魚や豚レバーのスープを持って何度もお見舞いに来ました。

4月18日、董事長は上海合璧に来るとまず袁英さんを見舞いました。事業で成功しても謙虚な態度を持ち続ける董事長が関心を寄せたのは一人の従業員であり、それは同時に600人の大切な家族でした。

今回の事件を一部始終見ていて、どうしてもこのことをみなさんに知ってもらいたくてこれを書きました。思いやりの心は感染していくものです。今後、それが従業員の間に広まり、大きな力となっていくことを願いたいと思います。

上海合璧総務部同仁　李高燕

上海合璧電子電器有限公司
中國201-805上海市嘉定區安亭鎮安墣路318號
TEL:+86-21-5950-5466

合璧と歩んだ10年

わたしは合璧の取引業者ですが、合璧と取引ができたことをとても幸運に思っています。しかも10年という長期にわたって。そんなわけで、わたしは合璧の企業としての発展の歴史や文化をずっと身近に感じてきました。

今後更なる発展を目指す合璧

合璧が上海に工場を建設したのは2000年のことです。そしてわたしの会社は2001年に業務をはじめました。そのころの資本金はそれまでに貯めたごくわずかなお金だけで、しかも営業許可書の申請も取得しておらず、工場にも簡単な設備がひとつあるだけでした。従業員もすべて家族で、まさに零細企業でした。はじめて合璧と商談したとき、わたしは相手にしてもらえるのだろうかという不安でいっぱいでした。施恵華さんがわたしの工場を見に来たときは、ただ「わたしたちは一生懸命合璧の製品を作ります」ということしかできませんでした。今思っても不思議です。合璧が取引をしてくれたのはわたしたちに対する同情だったのか、それとも何かほかの理由があったのか・・・・・・。

はじめ、合璧は品質や生産管理の方面でわたしたちを指導してくれました。わたしたちもそれに応えようと一生懸命努力しました。そして、合璧は我が社にとって一番の得意先になりました。わたしたちは合璧の「感謝に報いて共存共栄」という経営理念のおかげで発展しました。品質のよいものを納入し、それが合璧のお客さんから評価され、業績が向上するという繰り返しでした。今、我が社の売上における合璧の取引額はそれほど多くはありません。しかし、合璧がわたしたちにとって特別な会社であることに変わりはありません。なぜなら合璧がわたしたちに与えてくれたものは商売だけではないからです。

合璧が発行する「合璧流」を読むと、合璧発展の歴史とともに詹董事長の大きな愛を感じることができます。

詹董事長は起業家として合璧を創立して40年、この間絶えず理想を追求しながら会社を大きくしてきました。その発展の陰にあるのが「感謝に報いて共存共栄」という企業文化や和やかな環境を追及する禅の心、そして会社を大きくしていきたいという強い意志です。また、詹董事長はこれらをすべて行動と結果によって実践してきました。これは本当に学ぶべきところです。

いつも合璧に伺うと鼓舞された気分になります。工場内の美しい景色、整頓された職場環境、礼儀正しい従業員たち、これらすべてに感心させられます。今は商談以外で合璧の従業員との付き合いはあまりありません。会社創立当初よくしていただいた施恵華さん、張炳香さん、何暁敏さん、林生富さんらはそれぞれ重要なポストで頑張っています。そして合璧は新人に惜しみなく投資します。トレーニングや学習を積極的に行います。これも従業員に対する重視と還元、さらには共存共栄の理念からくるものでしょう。

合璧は大きな家族のようです。この家族には上の者の温かい心があり、下の者の学ぶ心があります。そしてみんなで大きな夢を共有しています。わたしの中で合璧はとても成功した企業です。そして詹董事長は偉大な人物です。彼の偉大さはその大きな愛と信仰にあると思います。

合璧のお客様はきっと満足しているでしょう。一流の製品を納入してもらえるからです。合璧の従業員はきっと幸せでしょう。よい家長を中心とした温かい家族に見守られているからです。そして合璧の納入業者はとても感謝しています。合璧から得られるものは利益だけでなく、何物にも替えられない知恵があるからです。

上海綜禾印刷有限公司總經理　李建新

毎日一得心得發表《感動》

「毎日ひとつの感動」という文章の最初にこうあります。「わたしたちは映画やテレビドラマを見たり、小説を読んだりしたとき感動を覚えます」。

そうです。わたしは長らくこんな感動を忘れていました。仕事が忙しくて心が枯れてしまったとか、あわただしさが心を占領してしまったとか、とにかく適当な言い訳で感動できなくなっていました。以前、友達がこんな手紙をくれたことがあります。「すれ違うのは縁がないからではなく、生活の中に感動の二文字が欠けているから」。こう考えると、やはり感動は大事なことだと思います。

今の世の中、感動することが少なくなったと不満をいう人がいます。本当にそうでしょうか。わたしはそう思いません。なぜなら、わたしたちの会社にはいつでもどこでも愛と感動があふれているからです。

仕事がうまくいかなくて落ちこんだとき、上司はわたしの肩をたたきながら「そんなに落ち込むな」と励まし、問題解決の方法を教えてくれます。肩をたたくぐらい簡単なことだと思うかもしれませんが、それでもそのときのわたしはとても勇気付けられ、感動します。毎日一生懸命生きていれば、励ましの視線やちょっとした微笑にもあふれんばかりの感動を発見することができます。これは「毎日ひとつの感動」という文章の中の「芸術作品にふれて感動を味わうことが習慣化すれば、現実の中でもそれと同じことが容易にできるようになる」ということだと思います。

あるとき週末にみんなで休日出勤をしたことがありました。会社はみんなの疲労を考えて翌週は一時間遅く出社してもいいことにしました。この時間はちょうど5Sの時間です。つまり、この期間中は5Sをしなくてもいいということです。しかし、ひとりの幹部が一生懸命トイレを掃除しているのを見ました。わたしは彼女の姿を見て感動しました。彼女は普段からとても親切な人です。言葉は多くありませんが、彼女の行動や態度には本当に感心させられることが少なくありません。

平凡なこともこだわりをもって続ければ平凡でなくなります。わたしたちは毎日多くの平凡なことに囲まれています。その中には感動がたくさんあります。が、それに気付かないこともよくあります。人が感動するのは生活の中に愛を感じるからです。世の中には愛があり、人の社会には情があります。そこから生まれる感動をなぜ見ようとしないのでしょうか。感動は言葉で表すものではありません。心で感じるものです。生活の中の小さな出来事がわたしたちを感動させてくれます。だからみなさん、できるかぎり善いことをしましょう。そして多くの人たちを感動させ、わたしたちも感動しましょう。

上海合璧製造課同仁　孟冉冉

合璧は我等温もりの家：我は合璧を愛し、合璧は我を愛する：關心關懷關照　同心同步同調！